

# ベルトコンベアから降りて立ち止まり、 高校までの学びや価値観をリセットする



「世界中の人々に平等な学習環境を提供する」という夢をもつ平田駿輔さん(現・東京大学大学院工学系研究科修士課程1年)は、2018年度にFLY Programに参加。「発展途上地域の学校を訪れ、子どもの学習環境を学ぶ」をテーマに、アジア・アフリカの国々にそれぞれ1週間～2か月ほど滞在し、学校での教育ボランティア活動などを行った。



机上の学びに留まらず、  
体験的な学びをしてほしい

欧米などでは、高校を卒業し、大学で学び始めるまでの期間の過ごし方として、中期の余白の時間をとり、ボランティアやインターシップ、国際交流などの活動に取り組み「ギャップイヤー」が選択肢の一つとして浸透している。一方、日本では、高校を卒業したらすぐに大学や専門学校に進学もしくは企業などに就職するのが一般的だ。そうしたなか、東京大学では2013年度から、入学直後の1年生が1年間休学し、自らが計画した社会体験活動に取り組む「FLY Program」を実施してきた。例えば、カナダの学校での日本語教育ボランティア活動を通して現地の学校教育について学ぶ、世界一周の取材旅行を通して都市の比較分析をする、サッカーが盛んな国を訪れてサッカー文化の醸成やチーム運営について学ぶなど、毎年7名ほどの学生が「Fly Program」の制度を利用してきた。2020、2021年度はコロナ禍の

影響で募集停止。

FLY Programが開始した背景について、同大 社会連携部 社会連携推進課 体験活動推進チームの内山 淳さんは次のように話す。

「2010年ごろに大学の秋入学についての議論が盛んになり、高校を卒業してから秋に入学するまでの半年間の過ごし方として、ギャップイヤーについても検討されるようになりました。結果的に秋入学は実現していませんが、当時の総長だった濱田純一先生の、学生に机上の抽象的な学びだけではなく、体験的な学びをしてほしい、社会に飛び出して空気を肌で感じて学んでほしいという強い思いがあり、FLY Programがスタートしました(内山さん)」

「短期間のイベント的な活動ではなく、どっぷりと浸かってほしい」という思いから、期間は約1年間という長期の設定になっている。また、国際性を身につけるといふ観点から海外での活動を推奨しているが、過去には被災地の復興とまちづくりについて学びたいと、国内の市役所でインターンをした学生もいるな

目的は自己教育。学生の  
自主性や意志を尊重する

FLY Programは、毎年、入学直後に募集を行う。希望する学生は、自分は何のためにどこで何をしたいのかという行動計画や資金計画を書面で提出。担当教員が書類を確

写真左から、東京大学 社会連携部 社会連携推進課 体験活動推進チーム 上席係長 内山 淳さん、同大 FLY Program 推進委員長(東京大学生産技術研究所 大規模実験高度解析推進基盤 副基盤長)北澤大輔教授。



東京大学「FLY Program」

認のうえ学生と面談を行い、採用が決まると、計画をブラッシュアップしていく。FLY Program 推進委員長の北澤大輔教授は、FLY Program の主旨について次のように説明する。

「FLY Program は自己教育のための仕組みであり、学生が自分が行いたいことをやる、自分で決めて行動する、そして活動を通じて自らを成長させることを最重要視しています。具体的には、学生1人につき3人の教員が付き、担当教員らから教育面や安全面に配慮した助言を受けつつ、学生自身が計画を具体化していきます」(北澤教授)

準備期間を経て6月から約10か月間、学生は国内外でそれぞれの活動に従事する。その間、月1回の定期報告が義務となっており、担当教員は学生からの相談などには随時対応するが、「基本的には安全上の配慮など見守りに徹する」という。活動終了後には報告会が開かれ、学生は自らの体験や学びについて発表する。事後アンケートの自由記述では、「何のために大学で学ぶのが見方が変わった」「自分の興味・関心に基づいて履修科目を選択するようになった」などの意見が多数見られるという。

### 立ち止まり考える時間が、学びへの姿勢を変える

大学での学びが始まる前に余白

をとり、社会に出て体験的に学び、自己教育をすることは、どのような意味があるのだろうか。内山さんは濱田元総長の言葉を引用して、次のように話す。

「ベルトコンベア式に高校から大学へと流されるのではなく、高校まで積み上げてきた学びをリセットする、受験勉強マインドや偏差値主義といった価値観をリセットする」というのが、FLY Program の意義の一つだと考えています。一度立ち止まって、大学で学ぶ意義や、自分は何を学びたいのかを考える。まさに、余白の時間です。東大には3年次に学部・学科を選ぶ進路選択がありますが、そこで何を軸にして選び取っていくのか、といったことにも大きく影響するでしょう。一度ベルトコンベアを降りて社会に出てリアルな体験をすると、大学に戻ってきたときの学びへのモチベーションも変わってきます。FLY Program に参加した学生から周囲への、正の波及効果も期待されます」(内山さん)

また、北澤教授も、FLY Program の意義について「受け身の学習から自主的な学びへの転換」を挙げる。「報告会で学生の発表を聞いていくと、自主的に活動する、物事を主体的に受け止めるといった点において、特に大きな効果があると感じます。実社会では何が課題になってい

るのか、その解決のためには何が必要かという視点をもてるようになることも、これから大学というアカデミックな場所で学ぶうえで大事なことだと思えます」(北澤教授)

### 多様な経験を通して考える、主体的な余白の時間を

FLY Program は、2023年4

月の東京大学入学式の藤井輝夫総長による式辞でも、二つの観点で言及された。一つは、イノベーションを起こすために重要なこと(の一つ)が、「外に出て、多様な経験をし、人脈を広げること」であり、その一例として、もう一つは、東京大学では「社会のさまざまな現場に直接に

触れあう機会を設けること」に取り組んでおり、「学びを社会と結び直す」体験型活動の一例として、北澤教授ならびに内山さんは、「大学という場に留まらず、多様な社会体験活動をしてほしいというメッセージが、濱田元総長の時代から脈々と受け継がれ発信されている」と強調する。

最後に北澤教授は、次のように締め括った。

「間が空いてはいけない、という思い込みがまだまだ強いのが日本の現状です。FLY Program は余白的な時間のとり方の一例で、修士課程を終えたとき、社会に出る前など、人生のどのタイミングで余白をと

てもいいと私は考えています。むしろ、そういう時間がない現状の社会システムに違和感があります。ベルトコンベア式に流されるように進むのではなく、少し立ち止まって、自分の人生や将来についてじっくり考える時間をもつことが大事なのではないのでしょうか」(北澤教授)

田中陸登さん(現・東京大学教養学部理科(類1年)は、2022年度にFLY Program に参加。「多様な世界で自分の価値観を相対化するとともに、それぞれの現代における問題を体感する」をテーマに、東京でのインターナショナルとアルバイト、香川県津田町での町おこし、ベトナムとタイでのボランティアと、多彩な活動を展開した。

